

海水

古山円造

浮ついた建物の隙間から

鈍い灯りが飛んでくる

海は円盤になって

人前にも関わらず

くすねられている

身体を横切る膜がもう一度解けて

首から下

草むらのように靡き翻る海

少年として駆けたい、と

思い出を辿りながら

恐る恐る歩みを進める

空気でタップタップに膨れ上がった街は

そこで終わっていた

海水で

肉体は

普通に死んでいる

オーバーサイズの揺籠に

加虐的に寝かしつけられた少年の石像を

憐れむようにカメラを回す

怠慢の代償に理性の罪と戦う友人

手に携えた細かい砂の塊

当分引き摺るだろう

夏の太陽は目に似ている

あんた見ているから言うけど

取り返しのつかないことは

身をもって思い知るに限る

遠くから人間の声がする、砂を払え